

マスク文化は赤ちゃんから？日本と欧米の違いを分析

有料会員記事 新型コロナウイルス

野中良祐 2021年5月31日 8時00分



マスク姿で通勤する人たち

日本と欧米の「マスク文化」の違いは、乳幼児の頃に芽生えている可能性があることが、京都大の積山薫教授（認知科学）らの研究でわかってきた。コロナ禍以前から、日本ではマスクを気軽に着用する人が多かった理由の一端なのかもしれない。

積山さんらは、会話の時に、相手の顔のどこを注意して見るかに注目した。成人の場合、日本人は目を、英語を母国語とする欧米人らは、口を主に見ていることがこれまでに報告されている。



見る部位を、相手に覆われてしまうとコミュニケーションに不安が生まれる。これが文化の違いにつながっていると考えた。実際、欧米では屋外でサングラスをか

けることが多いが、マスクは日本に比べて一般的ではなかった。

会話の時に見る部位が違うのは、日本語と英語の言語的な構造が違うためだ。日本語は母音や子音の種類が少なく、口の動きから言葉を読み取るヒントが少ない。感情やニュアンスは「目は口ほどに物を言う」という通り、目から読み取る。一方、子音が多い英語は、口を様々なパターンで動かすため、口を見る方が正確に理解しやすい。

言葉を覚える途中にある乳幼児はどうなのか。欧米の研究では、乳幼児は生後1、2カ月は目を主に見ているが、生後5カ月ごろから口に視線を移すようになっていくことがわかっている。

そこで、積山さんらは日本人の乳幼児がどういう傾向を示すのか、生後6カ月から3歳の子ども120人を集めて、画面越しに物語を話す人の顔のどこを見ているか、視線を追った。

すると、意外な結果が得られた。赤ちゃんは主に目を見ており、2歳前後では欧米と同様に口に視線を注ぐ時間が増えた。ところが、成長した3歳前後では、再び目をよく見るようになった。

ずっと目を重視する傾向ではなく、欧米と同様でもなく、いったん口元を重視するようになった後で、目

の重視に回帰する傾向がみられた。

理解している言葉の数が多い子の方が、目を見る傾向が強いこともわかった。知っている言葉であれば、口を見る必要がなくなるためだという。積山さんは「乳幼児からの傾向が、大人の日常行動の文化差の源流になっている」と話している。(野中良祐)

【スタンダードコースへの乗り換えキャンペーン実施中！】
追加料金なしで全記事読み放題／スクラップも使える新コースを体験！9/7まで

新型コロナ情報

こちらで読めます>

新型コロナウイルス最新情報 [→](#)

最新ニュースや感染状況、地域別ニュース、予防方法などの生活情報はこちらから。[記事一覧へ]

朝日新聞デジタルに掲載の記事・写真の無断転載を禁じます。すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。

Copyright © The Asahi Shimbun Company. All rights reserved. No reproduction or republication without written permission.